

# コロナ休校 京都でアンケート調査

## 障害児の居場所確保を

障害のある子どもが通う放課後等デイサービス事業所などの連絡会である「京都障害児放課後活動パッチワーク」が、新型コロナウイルス流行にともない行った「障害のある子どもと家族のコロナ休校のもとでの生活に関するアンケート」から、障害児の居場所を確保する必要性が浮き彫りになりました。

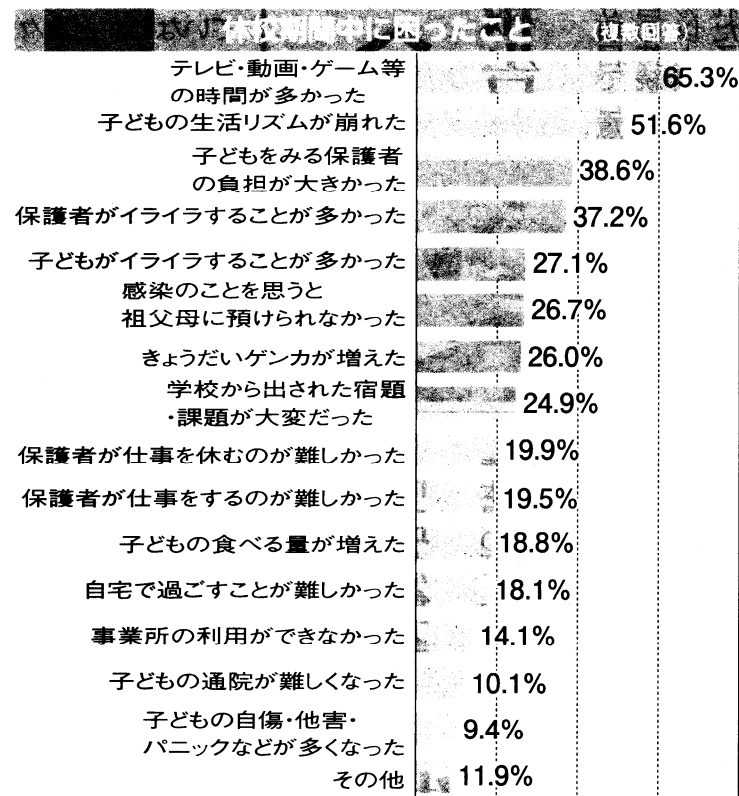
京都府在住の小・中・高の各学校に在籍する障害のある子どもの保護者を対象に6〜7月にかけて実施。288人が回答しました。

休校中の過ごし方（複数回答）について「親と過ごした」と回答した人が85・8%で最も多く、次いで「放課後等デイサービス（またはタイムケア等）に行った」が68・8%でした。

安倍晋三首相（当時）が2月に突然要請した一

### 「しんどい状況」

## 家族任せにしない仕組み必要



障害のある子どもと家族の「コロナ休校」のもとでの生活に関するアンケート(概要報告)から

子どもも保護者もしんどい状況があるのでは」と指摘します。

学校の対応で良かったことについて、アンケート

トでは「特例預かりがあり希望通り預かってもらえて助かった」「スクールのバスの人数を減らしバスの本数を増やしてもらえた」「家庭訪問や電話での様子伺いを何度もしていたら親も子どもも安心できた」などの記述がありました。

一方、不満に思ったことには「預かりがあったものの短時間で、仕事を

持つ人はどうして利用できなかった」「スクールバスが出ず、車がないので結局利用できなかった」など記述がありました。

### 「最大限の役割」

学校が休校になる一方、厚生労働省は放課後等デイサービス事業所には子どもの居場所を確保する観点から原則的には開所を要請しました。丸山さんは「場所も狭く、多くの子どもたちが利用するには限界のある事業所よりも学校が最大限役割を果たし、受け入れを追求したほうが、感染対策として合理的だったのでは」と疑問を呈します。

アンケートで放課後等デイサービス事業所の良かったこととしては、「親の仕事の時間まで預かってもらえた」「利用できなくて生活リズムが嫌がるので、感染しないためとは思うが、もう少し煮詰まりそうなところを見ただけで心身ともに（休校を）決定してほしかった」などがありました。

不満や疑問点については「利用者が多く利用できない日があったり、時間が短かったり、パートで働く私にはキツイ条件だった」「送迎がなかった」「お弁当やお菓子持参の強要。うちの子はよだれがあるのにマスクの強要」などの声がありました。

今後コロナ感染が再拡大した場合について、丸山さんは「対応が迫られる事態が起きた時、家族まかせにしない仕組みが必要だ」と指摘します。

「子どもを家に閉じ込めるのではなく、感染リスクを下げつつ子どもの過ごす場を奪わないことが大切」と強調しました。